

Profile

沢山俊民（さわやま・としみ）：  
さわやまクリニック院長、川崎医科大学名誉教授。  
米国心臓病協会上級会員、国際脈管学会上級会員。  
京都府立医科大学卒業後、米国エール大学心臓内科  
留学、帰国後川崎医科大学循環器内科学教授に着任。  
定年退職直後に「さわやまクリニック」を新規開業し、  
予約制で心筋梗塞・脳梗塞の予防と安らぎの医療を  
提供している。現在も執筆（50種類）・講演・教育・  
研究活動を続行中。

# 聴診はどうして重要か？

有事の際には  
五感診療しか  
役立たない！

心臓血管系の聴診は、患者を診療するにあたって最も早期から手がけられた手技である。しかも関連作法である視診・触診を併用すると、かなりの正確さで心臓血管疾患の診断のみならずその重症度も評価できる。しかも用いる道具は聴診器以外には我々に天性として備わっている五感のみである。五感を用いるコモンテクニックが、最近とみに体験される大地震等の災害時において精密機器が使用不能な状況下でもどれだけ役立つかは、火を見るよりも明らかである。

心エコーに  
走って心疾患を  
見逃した！

以前筆者は、2名の患者が、カラードップラ心エコー検査の前に聴診がなされていなかったため、それぞれが有する心室中隔欠損と動脈管開存をともに見逃されていた、という事例を体験している。先天性心奇形や弁膜症の患者も悪性腫瘍の場合と同様、自覚症状に乏しい時期には自ら医療を求めるものではなく、心筋が障害されてはじめて症状が発現するケースが多い。しかしそうなるからでは中隔欠損閉鎖術や弁置換術の適応からはずれてしまう。

聴診器、  
一本“さらに  
巻いて”

種々のハイテク装置が用いられるようになった現今、心臓血管系の病態異常も詳細に理解されるようになってきた。そうになると、他のどの検査法よりも長期にわたってはぐくまれてきた聴診を含む診察作法の価値も、一層高めるべきであろう。そのためにも今回「聴診器をうまく使うコツ」を、心血管疾患患者に対する五感診療を通じて習練してみることにしよう。

# 聴診器を うまく使うコツ

## —心臓血管疾患患者の 五感診療から学ぶ Part 1

著●沢山俊民